

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	荊木 まき子
2. 審査委員	主査：（岡山大学教授） 安藤 美華 代 副主査：（岡山大学教授） 渡邊 満 委員：（岡山大学教授） 上地 雄一郎 委員：（兵庫教育大学教授） 松本 剛 委員：（岡山大学教授） 高瀬 淳
3. 論文題目	教員とスクールカウンセラーの協働による学校支援に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 荊木まき子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時： 平成28年2月7日（日）15時00分～16時00分 場所： 岡山大学教育学部 本館3階 346教育臨床演習室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 (1) 論文の構成 本論文は、7つの章から構成されている。</p> <p>序章 本研究における問題の所在 第1章 スクールカウンセリングおよび学校支援における教員とスクールカウンセラーの協働 第1節 教員とスクールカウンセリングの協働から見た学校支援の特徴 第2節 学校における協働についての理論 第3節 本研究の目的と構成 第2章 教員とスクールカウンセラーの協働による学校支援に関する先行研究の概観 第1節 文献選択の基準と検索方法 第2節 検索方法 第3節 研究の選択 第4節 結果 第5節 考察</p>

第3章 スクールカウンセラーから見た学校支援に関する研究

第1節 スクールカウンセラーから見た学校支援の特徴（研究1）

第2節 スクールカウンセラー調査による協働的背景の現状（研究2）

第4章 教員から見た学校支援に関する研究

第1節 スクールカウンセラー協働先進校教員面接調査（研究3）

第2節 小学校の教務主任のリーダーシップによる協働的職場風土構築に関する実践研究（研究4）

第5章 教員間協働と教員とスクールカウンセラー協働との関連性（研究5）

第1節 本研究の課題と目的

第2節 予備調査

第3節 教員間とスクールカウンセラーと教員協働，学校支援質問紙による測定項目

第4節 方法

第5節 結果

第6節 考察

第6章 本研究の総括

第1節 総合的考察

第2節 今後の課題と展望

（2）論文の概要

各章の概要は、以下に示すとおりである。

序章では、不登校や学級崩壊等、学校において解決が迫られている喫緊の課題に対して教員間による協働，教員とスクールカウンセラー（以下 SC と略記）の協働により，児童生徒の行動面および心理面のケアや相談等が主に生徒指導や教育相談を通して行われている現状について示した。そして，教員間および教員と SC の協働による学校支援の必要性が強調された。

第1章では，学校支援における教員間および教員と SC の協働について検討をすすめるにあたり，主な研究分野である心理学と教育学の先行研究を概観し，課題を浮き彫りにした。すなわち，いずれの分野においても組織的な協働の重要性が目指されているものの，実際には困難であることが示された。この課題解決の一助となることをねらいとし，教員間および教員と SC の協働を円滑に行える学校支援のあり方を明らかにすることを本研究の目的とした。

第2章では，教員間の協働による学校支援，教員と SC の協働による学校支援に関する詳細な先行研究の概観が行われた。それぞれの協働の内容と関連要因の検討から，両者の協働による学校支援を行うには，教員と SC 間の相互理解，それぞれの役割や業務の明確化を含めた学校支援の整備が重要であることが明らかになった。

第3章では，第1章，第2章の概観から見えてきた協働の課題を踏まえて，まず SC から見た教員間協働，教員と SC の協働，学校支援について，SC13 名を対象に面接調査が行われた。グラウンデッド・セオリーのストラウス・コーピング版，戈木版を応用した質的分析から，情報共有，役割分担，支援のための疎通性，管理職の協働的配慮，設置者の関わり，学校規模，協働の促進要因と阻害要因が，学校支援の実現に関連することが示された。また，協働を行う背景には，SC の職業的発達，教員や SC の専門性，学校と個別相談機関の支援形態，SC から見た学校種の特性，学校支援に特徴のある学校が関連していることも示された。このような学校支援に関わる要因は，教員と SC の協働にも，教員間協働にも関連することが明らかとなった。

第4章では、SCとの協働が先進的なある中学校の校長、研究主任、養護教諭に行った面接調査、学校支援を構築した小学校の教務主任の報告書により、教員の立場から見た学校支援について探索が行われた。質的分析から、教員とSCの協働や学校支援構築には、教員間の協働も視野に入れた学校の実情に合った校務分掌の設定や配置、全学級での授業研究の推進、児童生徒支援のための定期的な会議設定、それらを行う上部組織の活性化等、総合的な組織設定、経営の必要性が示された。

第5章では、第3章および第4章の質的分析に基づいて、教員間協働、教員とSCの協働に関する質問項目を作成し、学校支援との関連について、小中高等学校教員363名を対象に質問紙調査が行われた。教員間協働、教員とSCの協働の充実度により対象者を3群に分けて、学校支援体制のあり方について検討が行われた。教員とSCの協働および教員間協働と学校支援体制の充実度は、相互に関連していることが示された。すなわち、教員間協働も教員とSCの協働も高いと認識されている学校は、そうでない学校に比べて、各種会議の開催やSCの職員室机の設置、懇親会へのSCの勧誘が多く、教員間の生徒指導の集団効力感や管理職の協働的配慮が高いことが明らかになった。

これらの検討踏まえ、最後の第6章では、教員間協働、教員とSCの協働の特徴および各協働を規定する要因についてまとめ、学校支援の全体像を示した。すなわち、学校支援における協働では、教員間協働、教員とSCの協働が相互に関連し合うことが確認された。より良い協働を構築するために、管理職やミドルリーダーが中心となって現状を把握し、ビジョンを掲げること、教員間の協働では、会議手法の整理や教員の専門性強化、校内支援チームの編成、校内研修の改善等、教員とSCの協働では、SCの職員室机の設置や懇親会への勧誘、SCの会議参加等の重要性が提言された。

2. 審査経過

本研究は、子ども達のよりよい発達に向けた学校支援にあたり、これまで個々に検討されてきた教員間協働、教員とSCの協働の両側面から検討を行い、両者の協働を円滑に行うことが可能な学校支援のあり方を検討することを目的に行われた。両者の協働から検討を行うために、それぞれの協働に関する先行研究の概観、SCの立場からの質的検討、教員の立場からの質的検討、それらを基盤とした教員間協働と教員とSCの協働と学校支援の関連の量的検討を行うという、丹念な検討の積み重ねによりすすめられた実証的研究と言える。そして、両者の協働による学校支援のあり方のひとつの方向性を提言するに至った論文として、十分に整合性のある構成になっている。

審査では、教員の視点から、SCの視点から、協働と学校支援について検討するという革新的な手法を行うことで、いずれの立場の視点からも、情報共有、役割分担、支援のための疎通性が重要であり、その質の向上や実現には、ミドルリーダーの組織的行動、さらには管理職の協働的配慮が大いに関連することが示された点が、独創的な研究であることが確認された。その一方で、本研究の不十分さも指摘された。たとえば、両側面からの検討は、各立場における協働について十分に深い水準には至っていないことが指摘され、SC、教員、ミドルリーダー、管理職という立場の者が、協働に向けて具体的にどのように活動していくのかの検討等、今後の課題として残された点である。

しかしながら、全体として本研究は、従来の教育学、心理学の研究の枠組み・視座を越える、協働のあり方に関する研究に多大な展望を与えるものと評価された。教員間協働、教員とSCの協働の重要性を示し、さらにそれらをつなぐ管理職の役割の大切さを示した点において、今後の学校支援のあり方に示唆を与えることができた。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、荊木まき子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するのにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。